コロナ禍で多職種連携教育の実践に挑む　―IPW 論－　2020

本学は全学科連携で学ぶ、実践的チーム医療教育に重点を置いたカリキュラム構成となっています。1 年次からチーム医療の具体的な内容やコミュニケーションの重要性を学びます。その集大成と言える科目が 3 年次前期に開講される「IPW 論」です。

ここで簡単に IPW 論の授業内容について説明します。

＜IPW 論の授業の構成＞全 15 回授業

STEP1 多職種の役割理解

医療職によって異なるチーム内での役割や専門性を再確認するため、他学科教員（全学科）による講義が行われます。

STEP2 模擬症例を用いたアプローチ方法の検討

本学オリジナルの模擬症例（18 症例）を基に自身が所属する学科内で治療や・ケアの方針を検討します。学科内で様々なアプローチ方法をディスカッションすることが、他学科学生と模擬カンファレンスを行うための大切な準備となります。

STEP3 教員による本格的な模擬カンファレンス

全学科の 3 年生が集合し、教員によるケースカンファレンスのデモンストレーションを見学します。緊張感漂う、現場さながらの雰囲気を目の当たりにすることで学生はカンファレンスの進め方や意思決定の取り方を学ぶことができます。

STEP4 本番！！学生によるケースカンファレンス[症例検討会]

ケースカンファレンス当日は、体育館にディスカッション用の机や椅子、ホワイトボードを約 40 チーム分運び込み、盛大に行われます。学生は同じ模擬症例を担当する他学科の学生と合流し、「チーム」を結成。治療やケアのアプローチ方法についてディスカッションを行います。職種が違い専門性も異なる中での意見交換は困難な部分もありますが、現場で行われるカンファレンスのリアルな感覚を経験できる貴重な機会です。ディスカッションは学生主導で行われ、方向性を見失ったり、行き詰ったりした際は、現場経験豊富な教員がファ

シリテータとして、適宜フォローできる体制を整えています。

STEP5 チーム発表&フィードバック

ケースカンファレンスの内容をまとめ、症例に対してのアプローチ方法をチームで発表します。教員からのアドバイスやフィードバック、他のチームの視点や見解を通してたくさんのことを学ぶことができます。これらの 5 つの STEP を経て、IPW 論の全授業は終了となります。
しかし、今年度は説明した通りには IPW 論の授業を進めることができませんでした。新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、IPW 論では欠かすことのできない「対面講義」や肝心のディスカッションの実施方法を大幅に変更する必要がありました。ここからは、対面授業の実施が困難な中で、教員と職員が一丸となって IPW 論という授業と向き合った話です。

STEP1

多職種の役割理解を目的とした授業については、全てオンライン授業としました。教員たちはオンライン授業にまだ慣れていないにも関わらず、試行錯誤の上、工夫を凝らした授業動画を作成し、学生に向けて YouTube を利用したオンデマンド配信を実施しました。

STEP2

学科ごとに行う模擬症例を用いたアプローチ方法の検討については、オンライン授業をベースに、ディスカッション等が必要な場合は感染対策をしっかりと行った上で適宜対面授業を実施するハイブリット型の授業で実施しました。

STEP3

IPW 論の目玉授業のひとつである教員による模擬カンファレンスについては、一度は実施することを断念しようと考えましたが、各学科教員と大学職員で構成する IPW ワーキングチームで検討を重ねた結果、例年通りの模擬カンファレンスをビデオ撮影し、学生にオンデマンド配信することでカンファレンスの臨場感が伝わると判断し、急きょ日程調整の上、模擬カンファレンス担当教員が集結し、ソーシャルディスタンスを保ちながら、本番さながらの模擬カンファレンスを学生に配信することができました。

STEP4

このようにオンライン授業への学生理解、教職員の工夫や団結力で、形を変えながらも従来通りの授業を展開できました。しかし、IPW 論の一番の核となる学生によるケースカンファレンスの実施方法については、IPW ワーキングチームの教職員も頭を抱え、非常に残念ではありますが、今年度は断念する方向で話が進んでいました。どうにかケースカンファレンスを実施できる方法はないかと皆で知恵を絞り、「ビデオ会議システムを駆使してのディスカッションはできないか？」をテーマに実際の開催については半信半疑のまま、ワーキングチーム内で課題解決のためのアイデアを出し合ったり、ビデオ会議システムで実施するためのマニュアルやガイドラインを作成したり、実現に向けて少しずつ着実に準備を進めていきました。そして迎えた当日のケースカンファレンスの様子は、パソコンの前に座り、話始める教員や学生、システムに問題がないか確認する職員、IPW 論に関わる者全員が緊張の中、ケースカンファレンスが開始されました。始まってみると不安がウソのように順調に進行され、学生同士も意見の交換やそれぞれの職種への理解を深めていました。

実のところ、インターネット回線の問題やビデオ会議システムを使用するための事前教育の不足など細かな課題はありました。しかし、今まで通りの対面での実施が不可能である中、どうすれば学生と一緒にケースカンファレンスで勉強することができるかを教職員が必死で考え、準備をした結果、学生たちも今まで準備したことをしっかり発揮してくれた様子でとてもうれしく思います。

STEP5

今年度の IPW 論はオンライン授業を中心に実施してきました。そうなるともちろん STEP5 のチーム発表もオンラインで実施です。学生たちには各チームで構築したアプローチ方法を動画で表現してもらいました。コロナ禍でなければ、教員や学生を前に対面で発表するはずだったのですが、今年度は各チームが作成した動画を学生と担当した教員全員が視聴できる環境にアップロードし、各担当教員が提出された動画を評価する手法を取りました。その評価結果をもって、例年通り優秀賞を 3 チーム選出し、先日その表彰式が行われました。学科によっては、学外実習中ということもあり表彰式に参加できない学生もいましたが、チームごとに学長との写真撮影、トロフィーと賞状の授与を行いました。また、各チームの代表者に IPW 論の授業について感想を語ってもらったのですが、このコロナ禍で学生も苦労しながら取り組んでくれたことについて実感しました。また、その中でも学生から授業を受けて自身の成長に繋がったという言葉をもらえたことで、学生と教職員で協力しながら授業を実施してきて本当に良かったと思いました。

今年度、コロナ禍で IPW 論を実施できたことは次年度以降の授業運営にも必ず活かしていきたいと思っています。

実際に関わった教職員のコメント

【学部長】

本学の特色でもある「チーム医療」の実践力を身につけるために「IPW 論」は非常に重要な科目として位置づけています。模擬症例をもとに学生同士がディスカッションを行い、チームとしてのケアプログラムを構築することで、自らが目指す医療専門職の役割と他職種の役割を理解し、また他者の意見に耳を傾け自らの考えを明確に伝えるコミュニケーション力を養うことができる科目です。今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、「IPW 論」を例年通り実施することができませんでした。その中でも核となる症例検討会（ディスカッション）をオンラインで実施することになり、受講する学生さん、教職員には多くの苦労があったと思います。しかし、その中でも工夫し、アイデアを出し合いながら「IPW 論」をやり遂げられたことは、大変うれしく思いますし、本学の学生、教職員を誇りに思います。

次年度以降も、この経験を活かし「IPW 論」のさらなる展開に期待しています。

【教員】

本学における IPW 論でのグループ討論は、学生にとって期待も大きいと思いますが、不安も多く感じていると思います。「他の職種はどのようなアプローチをしてくるのだろうか？」「自分たちのアプローチ案を受け入れてくれるのだろうか？」そんな不安をもって臨んでいるのではないでしょうか？しかし、今年度はその不安にさらに新型コロナウイルス感染拡大の中での授業によって、IPW 論にとって肝心要のグループ討論の開催自体が危ぶまれました。職員と教員がどのような形で開催できるのか？を一緒に悩み，オンラインでの開催を決めました。学生にとっては慣れないオンラインという環境、初めて出会う他学科の学生たちとの討論にとても不安が大きかったのではないでしょうか？しかし、いざグループ討論が始まると，学生たちがどんどん主体的に討論を進め、自分たちの意見を主張しながら、かつ他職種の意見を受け止めながら、その患者様にどのようなアプローチが最善なのかを決定していく姿が印象的でした。携わった教員にとっては，どの学科の学生も今後の臨床での活躍が楽しみで仕方ありません。

【職員】

私はディスカッションを実施する上で必要となる学生・教員向けの各種マニュアル作成や、実際にディスカッション当日の運営を担当しましたが、すべてが初めての経験だったこ

ともあり、ディスカッションが終わるまではとても不安な気持ちでした。しかし、学生からは、対面ではない中でも他学科(他職種)への理解が深まったという意見や、画面越しではありますが、真剣にカンファレンスに取り組む学生の姿を見ることができて色々悩みながら進めてきましたが、オンラインでディスカッションを実施できてよかったと思いました。